

2 萱中遺跡第1次調査・第2次調査出土の古墳時代の土器について

相田 泰臣

●第1次調査（調査番号2018173）

所 在 地 新潟市西蒲区馬堀地内

調査の原因 馬堀地区県営ほ場整備事業（公共事業）

調査期間 平成30年10月23日～25日（3日間）

調査面積 104.24m² (1~14T)

調査担当 龍田優子

処置 繼続協議

●第2次調査（調査番号2018173）

所 在 地 新潟市西蒲区馬堀地内

調査の原因 馬堀地区県営ほ場整備事業（公共事業）

調査期間 令和2年1月28日～30日（3日間）

調査面積 98.1m² (127~136T)

調査担当 牧野耕作

処置 繼続協議

（1）調査に至る経緯と調査の概要

第1次調査は県営ほ場整備事業の揚水機場建設に伴い、新潟地域振興局の依頼を受けて行った試掘調査である（図2）。平成30年10月4日付で報告して調査を実施した。

第1次調査は第1～3揚水機場予定地（調査地1～3）の3地区において計14か所のトレンチを設定し、重機による調査を行った。その結果、第3揚水機場予定地内の13T（図3のH30-13T）で弥生時代から古墳時代移行期の土器がテンバコ1箱分出土したため、萱中遺跡として周知化を行った（図3・新潟市遺跡番号802）。

さらに、萱中遺跡の詳細を確認するため、令和2年1月に確認調査（第2次調査）を実施した。第2次調査は第3揚水機場予定地内において10か所のトレンチを設定し、重機による調査を行った（図3の127～136T）。その結果、遺構は確認されなかったが、127Tを除く9か所のトレンチでテンバコにして1箱分の遺物が出土した。そのため、遺跡範囲を拡大した（図3）。

（2）調査地の位置と環境

萱中遺跡は、西川と中ノ口川の間に広がる平野の中央を流れ、かつては鎧潟とつながっていた大通川の左岸に位置する（図1）。現況は水田で、現田面の標高は約2.5～3.1mを測る。調査所見から、古墳時代には大通川左岸の自然堤防上に立地していたと推測される。

（3）調査地の基本層序と古地形

調査では土層の色調や粘性・しまり、含有物などに

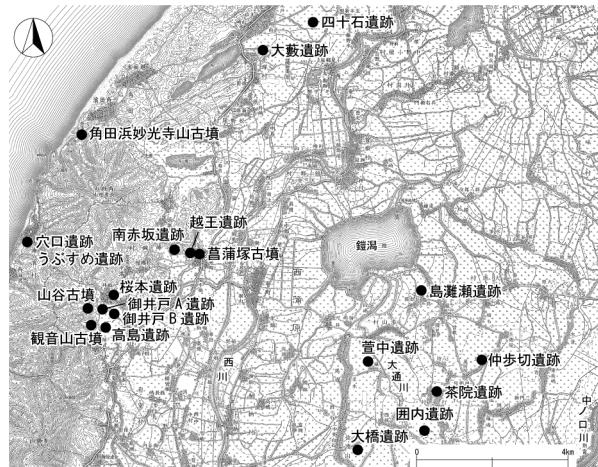


図1 萱中遺跡と周辺の主な古墳時代遺跡分布図
(1/50,000地形図「彌彦」明治44年大日本帝国陸地測量部に追加)

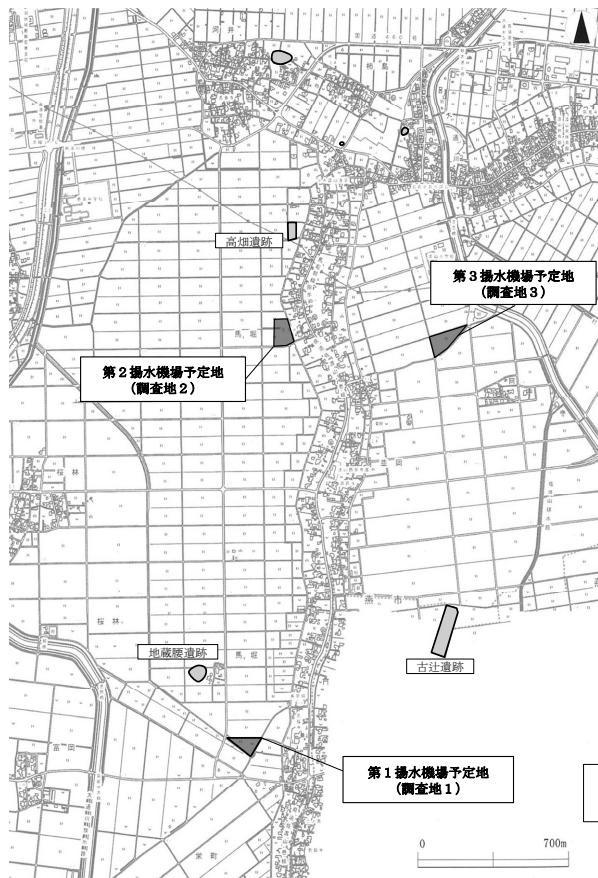


図2 調査地位置図（新潟市地形図 1:2,500に加筆）

よって基本層序をI～VII層に分け、さらにその中を細分している（図4・5）。主な土層としては、I層：表土・耕作土、II層：青灰～黒褐色粘質シルト、III層：灰白色～青灰色砂質シルト、IV層：灰白色粘質シルト、V層：青灰～オリーブ黒粘質シルトと砂質土の互層、VI層は青



図3 第3揚水機場予定地(調査地3)第1次調査・第2次調査トレンチ位置図
(遺物が出土した調査地3のみ掲載 土層柱状図は図4・5)
(新潟市地形図1:2,500に加筆)

灰～灰色粘質シルト、VII a層は暗褐色粘質シルトで炭化物を少量含む、VII b層は緑灰色粘質シルト、VIII a層は緑灰色砂質シルトである。このうち、遺物はいずれもVII a層から出土しており、遺物包含層と考えられる。なお、第1次調査・第2次調査とも遺構は確認されていないが、VII b層・VIII a層が出土遺物の時期における基盤層、遺構確認面に相当する層と推測される。

さて、第3揚水機場予定地の各トレントにおけるVII・VIII層の標高を比較すると（図3～5）、調査地南西側に位置するH30-11Tと130Tで高く、132T、131Tと続く。それに対し、調査地北東側の135Tや136Tなどは低くなっている。このことから、調査地の南西側を中心として南北方向にのびる自然堤防が存在していたことが推測される。

(4) 出土遺物

第1次調査と第2次調査でテンバコ2箱分の土器が出土した。このうち25点について実測・掲載した(図6・表1)。1~13が第1次調査、14~25が第2次調査で出土した遺物である。以下、出土遺物の概要について記載するが、調整等の詳細については表1を参照されたい。

1～13は13T VII a層出土土器である。1・2は器台の受部でどちらも脚部を欠損する。1は受部が直線もしくは内湾気味にのびる。2は途中、口縁が上方へ屈曲する。口縁端部内面は面をもつ。3～6は高杯もしくは器台の

脚部である。3は脚部に円形の透かし孔を3つ確認できるが、配置から計4孔であった可能性が推測される。

7は直口壺の口縁部で、外面は粗いヘラミガキが施される。8は甕の可能性もあるが、器壁が厚く、くの字状に外反する壺の口縁部と考えた。9は底部で、外面には比較的丁寧なヘラミガキが施されている。小型の壺あるいは鉢の底部であろう。10は外面にヘラミガキが確認できる。壺の底部と推測する。

11～13は甕の口縁部資料である。口縁端部は11が斜め上方に摘まみ上げており、面をもつ。12の口縁端部は丸く収まる。13の口縁端部は外方へ摘まんでおり、端部は尖り気味に収まる。13の外面は、口縁端部まで斜位の細かいハケメ調整が行われている。

14は128TⅦa層から出土した鉢で、体部から口縁端部まで内湾しながらそのまま収まる形態をなす。15~17は129TのⅦa層出土土器で、15・16は器台の受部である。15は口縁端部を上方へやや摘まみ上げることにより面をもつ。16の口縁端部は上方へ強く摘まみ上げ、屈曲させており、明瞭な面が形成されている。17は器台の脚部と推測する。脚部は裾部との境に段を有し、段には刻み目が等間隔で施される。また、刻み目の下には擬凹線が2条確認される。

18・19は131TのVII a層出土の鉢で、どちらも比較的遺存率が高く、特に19は底部をわずかに欠損するものの

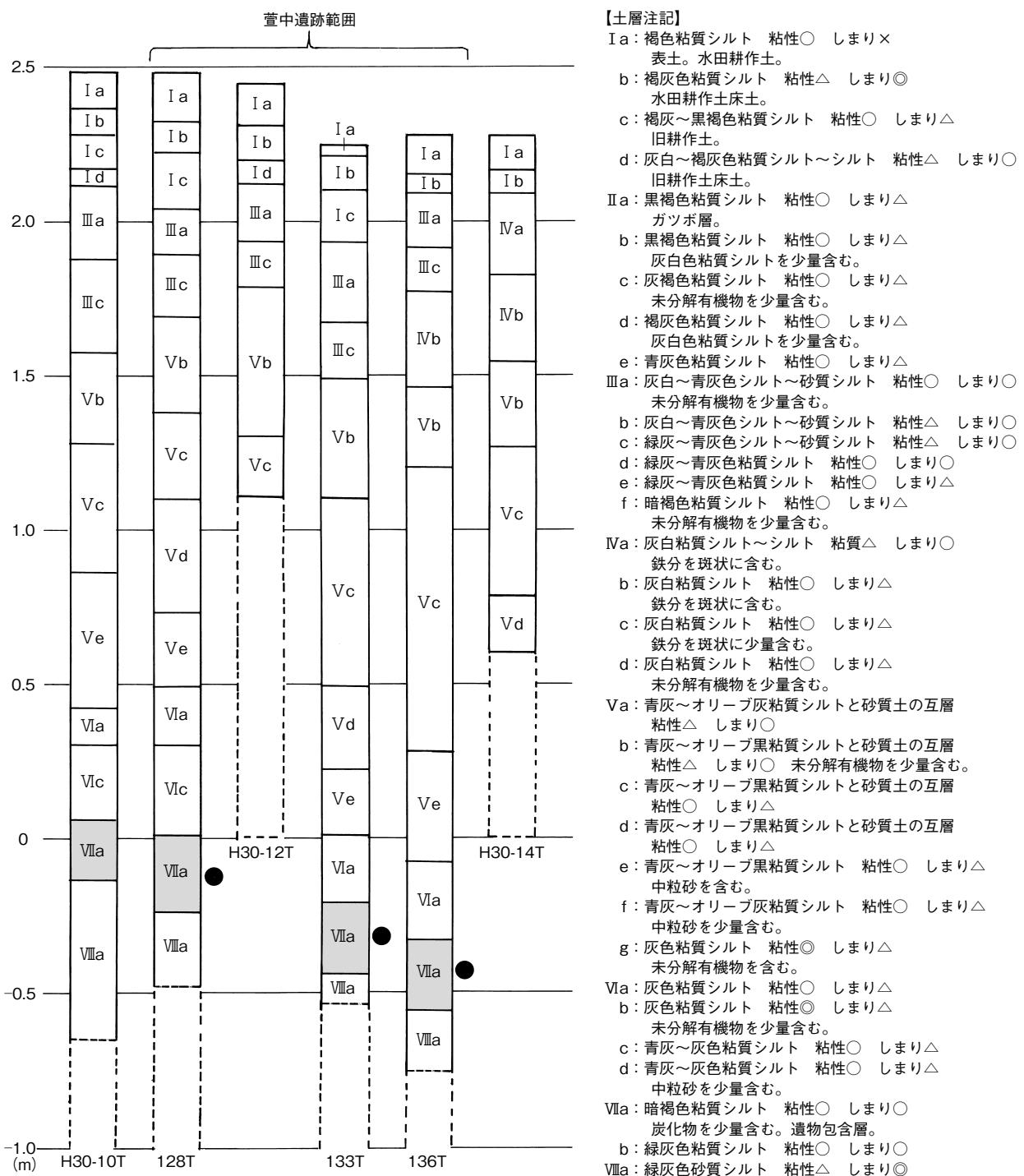
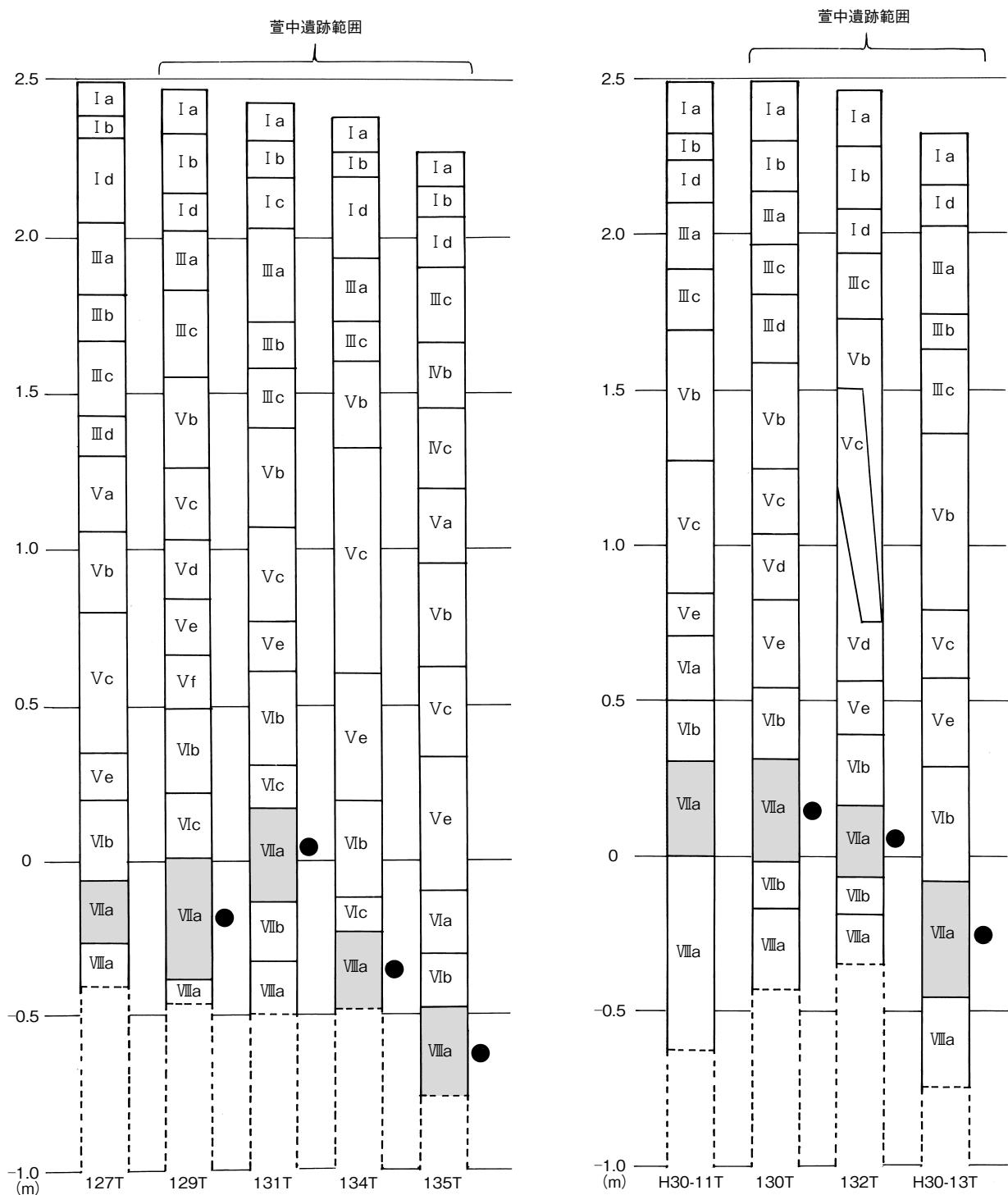


図4 萱中遺跡第1次調査・第2次調査土層柱状図1
(第1次調査は萱中遺跡にかかる第3揚水機場予定地(調査地3)のトレンチのみ掲載)



●は遺物出土層位。
H30-11・13Tは第1次調査トレンチ。それ以外は第2次調査トレンチ。

図5 萱中遺跡第1次調査・第2次調査土層柱状図2
(第1次調査は萱中遺跡にかかる第3揚水機場予定地(調査地3)のトレンチのみ掲載)

略完形に復元できる。18は体部から口縁部まで内湾しながら収まる形態で、口縁端部を上方へ僅かに摘み上げるため、口縁端部内面には面が形成されている。中心部を欠損するが、片口の張り出しが一部確認できる。底部以下を欠損するが、体部から底部へのび具合から、台

(脚)が付く形態の鉢となる可能性がある。19は径の小さい平底の鉢で、体部から口縁端部まで内湾しながら収まる形態をなすが、18と同様、口縁端部を上方へ僅かに摘み上げている。18と19は片口や底部形態を除き全体的に類似した形態であるが、18の方がやや小振りである。

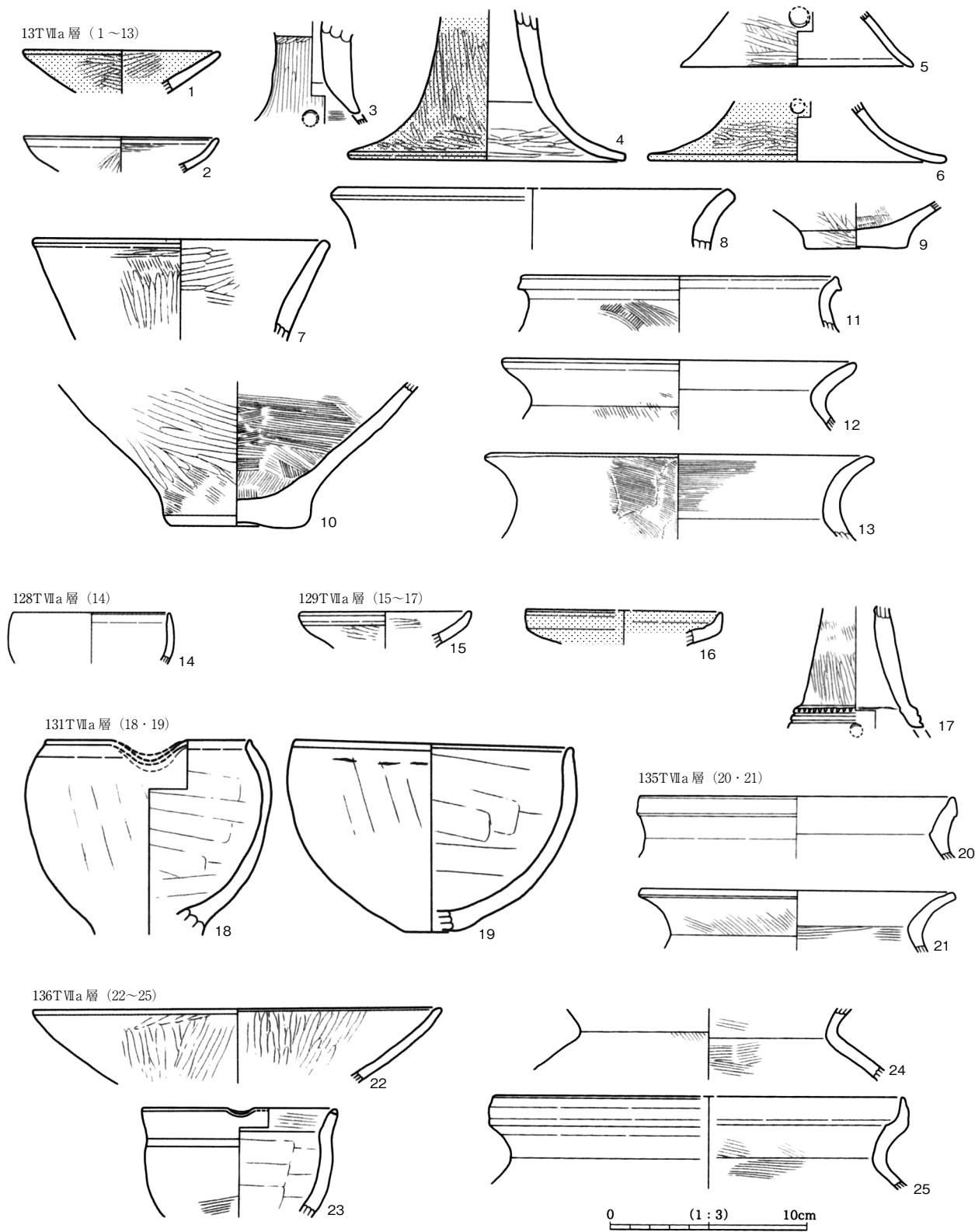


図6 萱中遺跡第1次調査・第2次調査出土遺物（アミかけは赤彩部分）

なお、18・19とも外面に類似した規模、色調で楕円状の黒斑及び焼成不良の痕跡が観察される。土器焼成の際、互いに接した状態で野焼きされた可能性を推測させる。

20・21は135T VIIa層出土の甕の口縁部破片である。20は口縁端部を上方に摘み上げており、比較的幅の広

い面をもつ。頸部の外反は弱い。21は頸部がくの字状に外反し、口縁端部は面をもつ。

22～25は136TのVIIa層出土土器。22はいわゆる東海系高杯の口縁部破片である。内外面とも縦位のヘラミガキが行われる。23は鉢で、口縁部は強くヨコナデされて

表1 掲載遺物一覧

番号	調査年次	出土トレンチ	出土層位	種別	器種	調整		備考
						外面	内面	
1	第1次調査	13T	VII a層	土器	器台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	受部内外面赤彩
2					器台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
3					高杯or器台	ヘラミガキ	ハケメ	透かし孔（4孔か。3孔確認）
4					高杯or器台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	脚部外面赤彩
5					高杯or器台	ヘラミガキ	ハケメ、ヘラミガキ	透かし孔（1孔確認）
6					高杯or器台	ヘラミガキ		脚部外面赤彩 透かし孔（1孔確認）
7					壺	ハケメのちヘラミガキ	ヘラミガキ	
8					壺			
9					壺or鉢	ヘラミガキ	ハケメ	
10					壺	ハケメのちヘラミガキ	ハケメ	
11					甕	ハケメ		
12					甕	ハケメ		外面スス
13					甕	ハケメ、指頭圧痕	ハケメ	
14	第2次調査	128T	VII a層	土器	鉢	ヘラミガキ		
15					器台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
16					器台	ヘラミガキ	ヘラミガキ	受部内外面赤彩
17					器台	ハケメ、ヘラミガキ		脚部外面刻み目・擬四線
18					鉢	ヘラナデ	ヘラナデ	片口鉢、外面黒斑
19					鉢	ヘラナデ	ヘラナデ	外面黒斑
20					甕	口縁部ハケメ	頸部ハケメ	
21					甕			
22					高杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ	
23					鉢	体部ハケメ	口縁部ハケメ 体部ヘラナデ	片口
24					甕	ハケメ	ハケメ	
25					甕		ハケメ	外面スス

おり、口縁部と体部との境は明瞭な稜をもつ。口縁端部の1か所が凹んでおり、片口土器と推測される。24・25は甕の破片である。24は口縁部を欠損する。肩部から頸部にかけて強く屈曲、外反する。25は頸部から口縁部にかけてくの字状に外反した後、口縁端部を摘んでヨコナデすることにより、内面に段を有し、端部は内傾・内湾して尖り気味に収束する。

出土遺物は東西約100m、南北約80mの範囲において同じVII a層から出土している。いずれも遺物包含層からの出土であり、また全体の形が分かるものも限られることから、細かな時期比定は困難であるが、器台の受部と脚部の形態や装飾、甕の口縁部や口縁端部の形態や形状、鉢の形態、細別器種の消長などから、新潟シンポジウム編年〔滝沢2005〕の6・7期を中心とする時期の資料と考える。当該期は弥生時代から古墳時代への移行期に位置づけられ、古墳時代早期（弥生時代終末期）と古墳時代前期にかかる。なお、18や19など完形に近い土器も出土していることから、周辺域において遺構の存在も推測される。

（5）まとめ

周辺の古墳時代の遺跡分布（図1）を見ると、北西約6～7kmに位置する御井戸A・B遺跡や山谷古墳、北西約5～5.5kmの南赤坂遺跡、菖蒲塚古墳など、角田山麓に集落遺跡や古墳が多い傾向にある。

それに対し、萱中遺跡が位置する沖積地周辺は、古代になると遺跡数が急増するものの、その前段階である古墳時代の遺跡分布は比較的希薄な状況である。一方、茶院A遺跡（同南東約2.0km）、島灘瀬遺跡（同北東約2.4km）、畠内遺跡（同南東約2.4km）、伸歩切遺跡（同東約3km）など、近年の調査で平野部でも古墳時代の遺跡の存在が明らかになる事例が増えており、従来の地域史像を見直す必要も生じてきている。今後、沖積地における古墳時代の集落の実態がより明らかになることで、当該期の地域史研究がさらに進展することが期待される。

—参考文献—

- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 新潟県考古学会